

第3章 調査結果のまとめと考察

本項目では前項目で記載した資料を引用しつつ、更なる考察を行っていくものとする。

3.1 回答者の属性

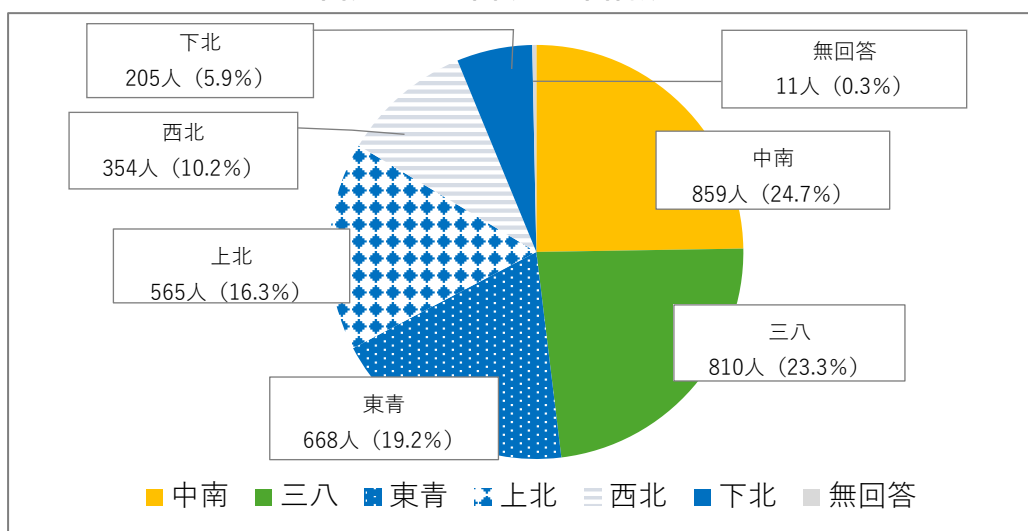
(1) 性別

男性が 52.3%、女性が 45.8% とほぼ男女バランスよく寄せられた。

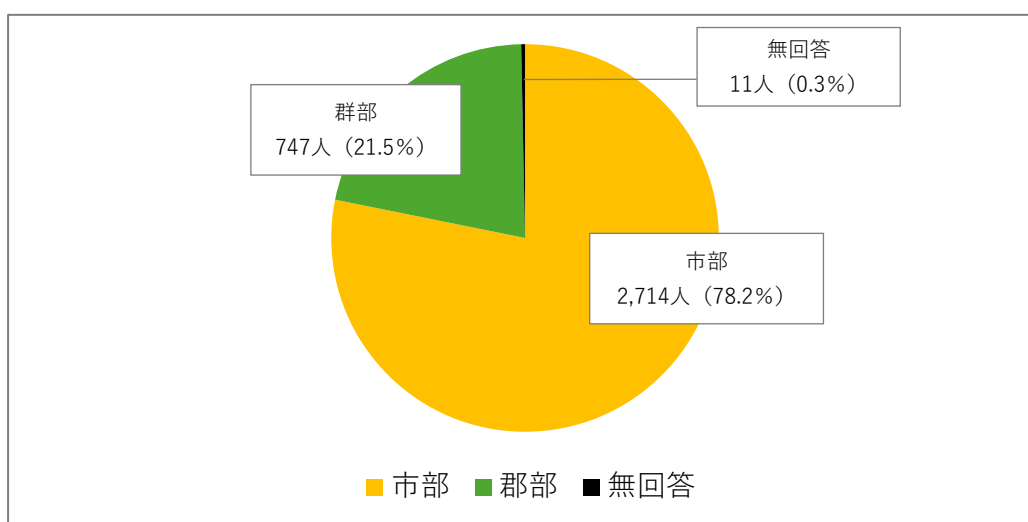
(2) 現在の居住地

40 市町村すべてから回答を得た。

図表 13 6 圏域別の回答数



図表 14 市部・郡部別の回答数



3. 2 家事分担

(1) 家事の中心は依然として母親

家庭において家事（料理・掃除・洗濯など）を主に担っている人について尋ねたところ、「父母どちらも行うが、母の負担が多い」が42.8%で最も多かった。次いで「母のみ」が35.8%、「その他（祖父母、兄弟姉妹など）」が19.6%となった。この結果から、家事の中心が依然として母親に偏っており、伝統的な家族観が根強く残る地域性がうかがえる。

一方で、「父母同じ割合で行う」と回答した生徒が14.6%いたことは、共働き家庭の増加や若い世代を中心としたジェンダー観の変化（家事は夫婦が共同で行うものという考え方が広がりつつあることを示している。家事を「女性の役割」とみならず価値観が徐々に薄れ、夫婦が協力して家庭を運営する意識が見られ始めていると考えられる。

しかし、平等な家事分担はまだ少数派であり、家庭内の役割分担において依然として課題が残っていることも読み取れる。

(2) 家事代行はまだ浸透せず：利用率わずか4%

家事代行サービスや食材宅配サービスの利用頻度については、「利用していない」と回答した家庭が95.8%と非常に高く、これらのサービスは多くの家庭でほとんど利用されていないことが明らかとなった。

青森県は、共働き率が高い一方で、「家事は家庭内でやるもの」「お金を払って頼むのは贅沢」「他人を家に入れるのは不安」などの理由が考えられ、「家事代行」という概念が浸透していないことが推察される。

3. 3 高校卒業後の進路

(1) 進学は県外、就職は県内

① 進学・就職における県内外の希望割合

図表 15 進路別の県内外希望割合

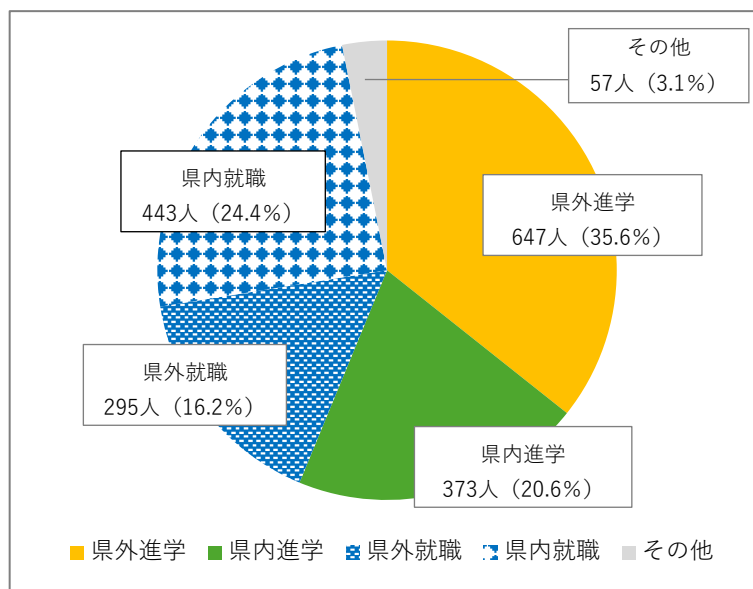
進学を希望する回答者の県内外割合			就職を希望する回答者の県内外割合		
進学	人	%	就職	人	%
県外	1,414	61.8	県外	414	39.0
県内	873	38.2	県内	648	61.0
計	2,287	100	計	1,062	100

高校卒業後の進路について、進学は県外希望が61.8%、県内は38.2%と県外希望が高い一方、就職は県内希望が61.0%、県外が39.0%と県内希望が高く、ほぼ同割合で逆転していることが分かった。

② 進学・就職における男女別希望割合

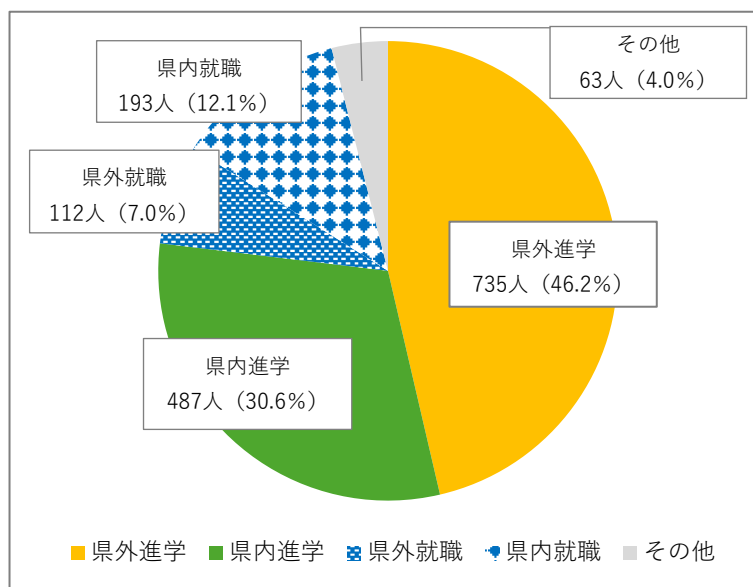
図表 16 高校卒業後の進路(男子)

男子	人	%
県外進学	647	35.6
県内進学	373	20.6
県外就職	295	16.2
県内就職	443	24.4
その他	57	3.1
計	1,815	100



図表 17 高校卒業後の進路(女子)

女子	人	%
県外進学	735	46.2
県内進学	487	30.6
県外就職	112	7.0
県内就職	193	12.1
その他	63	4.0
計	1,590	100



進学希望率は、男子が56.2%、女子が76.8%であり、女子の方が男子よりも高いことが分かった。青森県ではこの傾向が過去8年間にわたり継続していることも確認された。

(出典：青森県教育委員会 教育政策課「進路状況調査」)

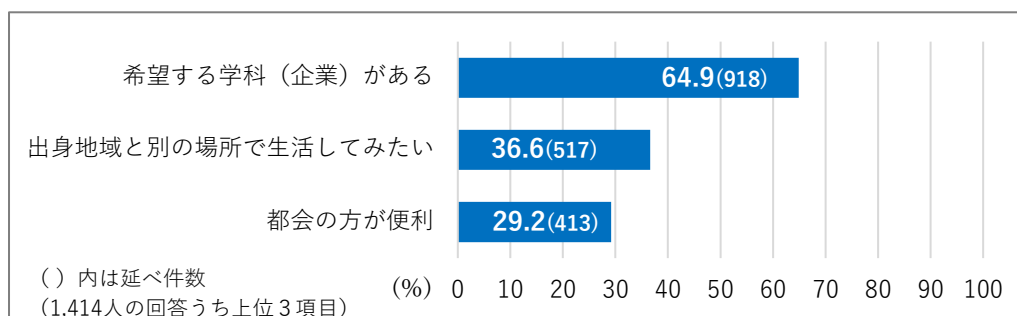
就職、進学を合わせた県外希望の割合は、男子が51.8%、女子が53.2%であり、男子より女子の方が高い結果となった。

③ 進学は県外、就職は県内の理由

a 県外進学理由

図表 18 県外進学理由 上位3項目

(複数回答)

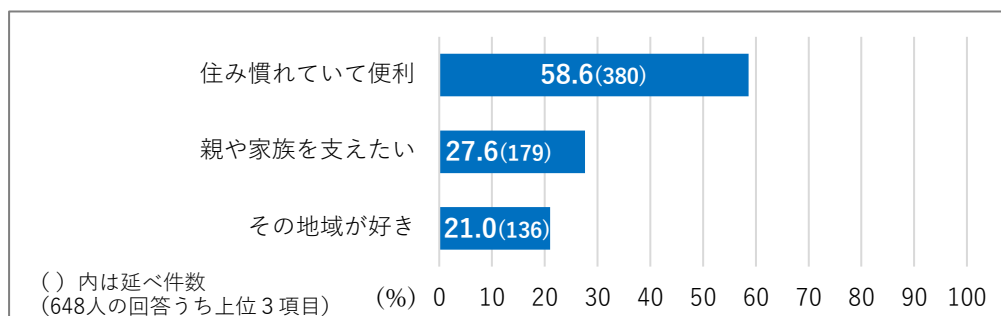


県外進学理由については、「希望する学科がある」が64.9%と最も高く、次いで「出身地域と別の場所で暮らしてみたい」が36.6%、「都会の方が便利」が29.2%と続いた。

b 県内就職理由

図表 19 県内就職理由 上位3項目

(複数回答)



県内就職理由については、「住み慣れていて便利」が58.6%と最も高く、次いで「親や家族を支えたい」が27.6%、「その地域が好き」が21.0%と続いた。

進学における県外志向の強さについては、高等教育機関の選択肢を広げるためと、別の場所で暮らしてみたいという好奇心、都会の便利さを求めての選択であることが読み取れた。

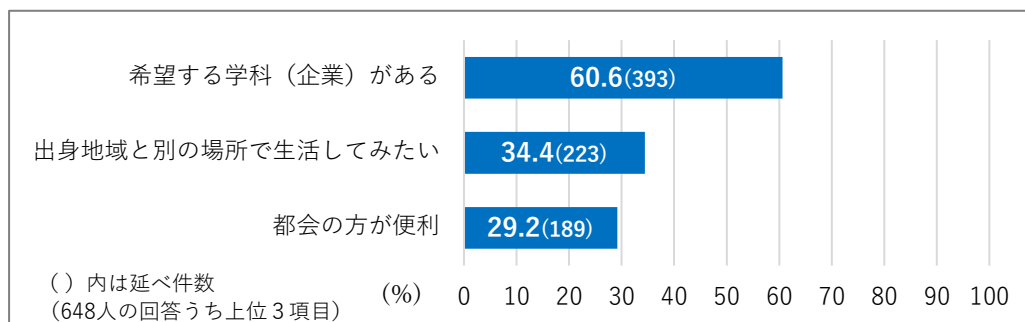
一方、就職における県内志向の強さについては、生活のしやすさと共に、家族の支えになりたいとの想いや地域への愛着が読み取れた。

④ 進路選択における男女の意識差

a 県外進学理由

図20 県外進学理由(男子) 上位3項目

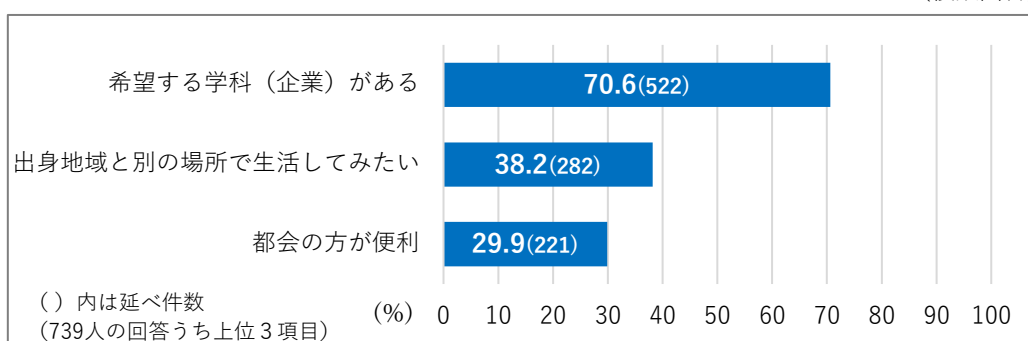
(複数回答)



男子の県外進学理由については、「希望する学科がある」が60.6%と最も高く、次いで「出身地域と別の場所で生活してみたい」が34.4%、「都会の方が便利」が29.2%と続いた。

図表21 県外進学理由(女子) 上位3項目

(複数回答)

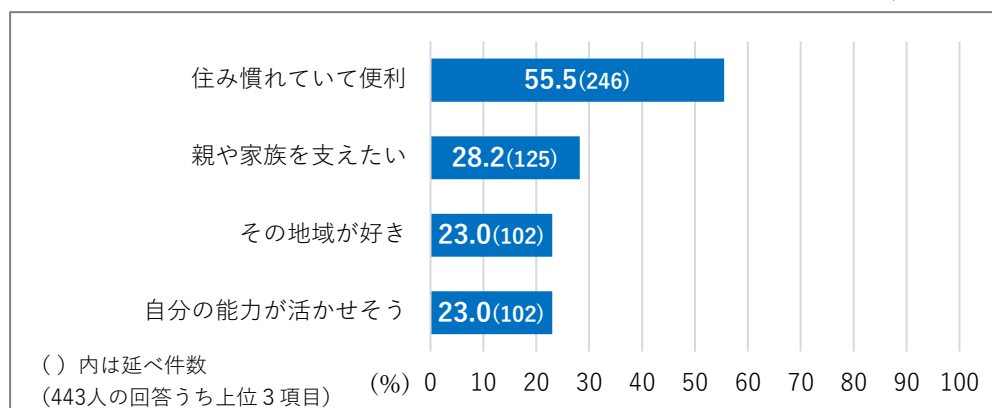


女子の県外進学理由については、「希望する学科がある」が70.6%と最も高く、次いで「出身地域と別の場所で生活してみたい」が38.2%、「都会の方が便利」が29.9%と続いた。

県外進学理由については、男女とも上位3項目の選択理由が同じであったが、女子の方が「希望する学科がある」を選択した割合が10ポイント高かった以外大きな差はなかった。

b 県内就職の理由

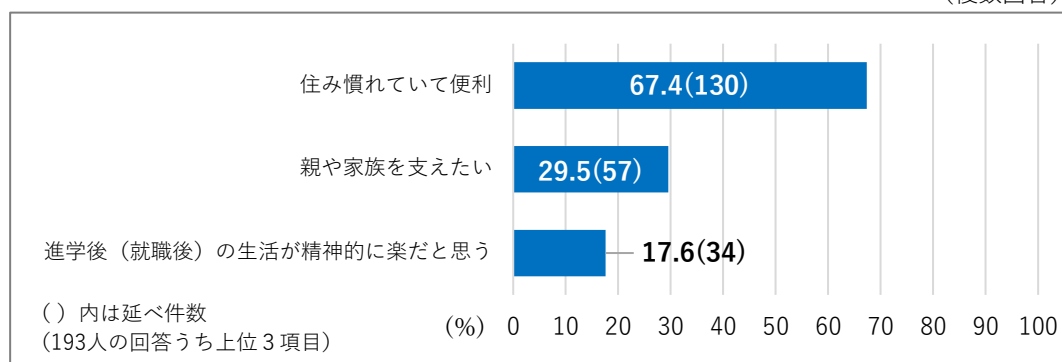
図表 22 県内就職の理由(男子) 上位3項目 (複数回答)



男子の県内就職の理由については、「住み慣れていて便利」が 55.5%と最も高く、次いで「親や家族を支えたい」が 28.2%、「その地域が好き・自分の能力が活かそう」が 23.0%と続いた。

図表 23 県内就職の理由(女子) 上位3項目

(複数回答)



女子の県内就職の理由については、「住み慣れていて便利」が 67.4%と最も高く、次いで「親や家族を支えたい」が 29.5%、「就職後の生活が精神的に楽だと思う」が 17.6%と続いた。

県内就職の理由については、男女とも上位2項目が共通していたものの、3番目の項目に意識の違いがみられた。男子では地域への愛着を示す「その地域が好き」と、地元でのキャリア形成への期待をうかがわせる「自分の能力が活かそう」が挙げられた。一方、女子では、生活環境の変化に対する慎重さがうかがえる「就職後の生活が精神的に楽だと思う」が挙げられた。

c 「自分の希望ではないが、そうせざるを得ないから」の理由

図表 24 「自分の希望ではないが、そうせざるを得ないから」と回答した回答者の希望する進路

男子	人数	女子	人数
県内進学	11	県内進学	29
県外進学	7	県外進学	10
県内就職	7	県内就職	8
県外就職	4	県外就職	2
その他	3	その他	2
計	32	計	51

「自分の希望ではないが、やむを得ずその進路を選択した」と回答した男子が32人、女子が51人で、女子は男子の1.6倍にのぼった。このことから、女子の進路選択には、男子以上に周囲の意向が強く影響する傾向が見られた。

進路先について、男子では「県内進学」が11人と最も多く、次いで「県外進学」7人、「県内就職」7人、「県外就職」4人、「その他」3人であった。県内選択者は18人、県外選択者は11人で、県内を選択した者が多かった。

「やむを得ずその進路を選択した」と回答した人のその他の理由としては、「親や家族を支えたい」が7人と最も多く、「経済的な負担が少ない」が3人で続いた。

一方、女子では「県内進学」が29人と突出して多く、次いで「県外進学」10人、「県内就職」8人、「県外就職」2人、「その他」2人であった。県内選択者は37人、県外選択者は12人で、県内を選択した者が県外の3倍以上にのぼった。

「やむを得ずその進路を選択した」と回答した人のその他の理由としては、「経済的な負担が少ない」が6人で最も多く、「親や家族を支えたい」が3人であった。

これらの結果から、男女ともに「希望ではないが県内を選択する」若者が一定数存在することが明らかとなった。ただし、その理由には性差が見られ、男子は家族支援を優先する傾向が強く、女子は経済的負担の軽減を重視する傾向が見られた。

3. 4 家庭・コミュニティのことに関する男女の意識

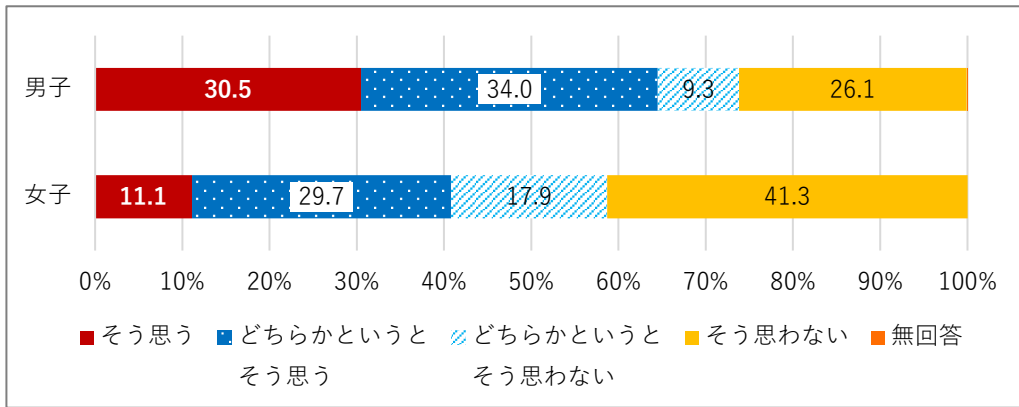
(1) 男女の意識差が表れた項目

① 「そう思う・どちらかというと思う」の割合が高かった項目

a 男性は仕事をして家計を支えるべきだ

「そう思う・どちらかというと思う」(男子：64.5% 女子：40.8%)

図表 25 「男性は仕事をして家計（生活にかかる費用）を支えるべきだ」 男女比



「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」という項目について、肯定的な回答（「そう思う」・「どちらかというと思う」）をしたのは、男子が 64.5%、女子が 40.8%で、男子の方が 23.7 ポイント高かった。

※ 家庭・コミュニティに関する項目の中で、肯定的な回答が 50%を超えたのはこの項目のみである。

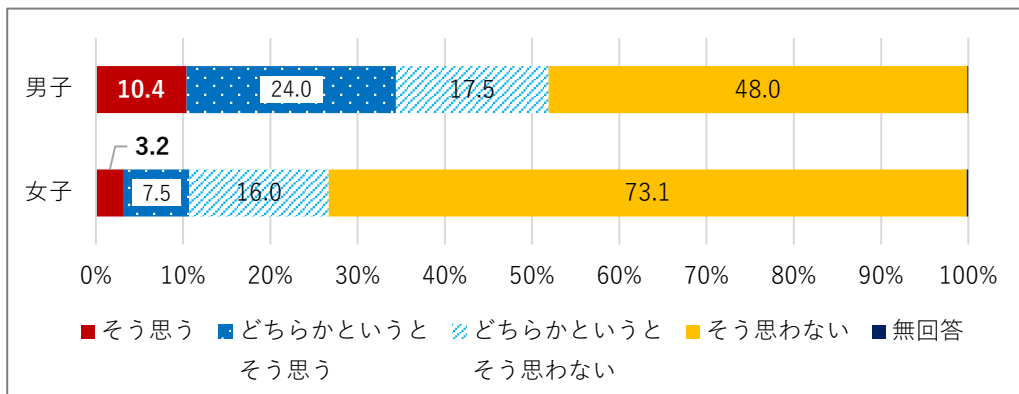
※ 以降、「そう思う」「どちらかというと思う」を合わせて**肯定的**、「そう思わない」「どちらかというと思わない」を合わせて**否定的**と表記する。

男子の約 6 割が肯定的であったのに対し、女子の約 6 割は否定的であった。男子は「家計を支える役割」を担うことへの責任意識が比較的強い一方で、女子はその役割を男性に必ずしも期待していないことがうかがえる結果となった。

② 「そう思わない・どちらかというと思わない」の割合が高かった項目

- a デートや食事のお金は男性が負担すべきだ
「そう思わない・どちらかというと思わない」
(男子：65.5% 女子：89.1%)

図表 26 「デートや食事のお金は男性が負担すべきだ」 男女比



この項目について、男女どちらも否定的傾向が強かったが、女子が男子より23.6ポイント否定的であった。男子の約3割が「負担すべき」と思っているのに対し、女子の約9割は負担を求めていることが分かった。

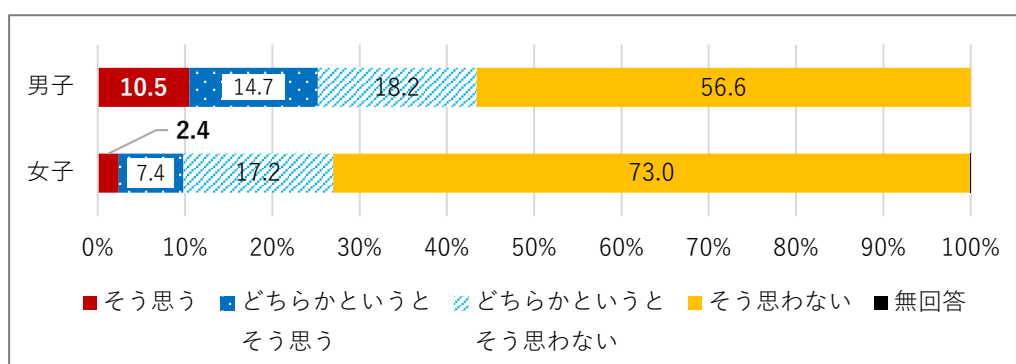
男子の中に、伝統的価値観や男らしさをアピールしたいという意識が若干残っていることが考えられるが、女子の方はむしろそのような価値観には否定的で、対等な関係を望んでいることが推察される。

b 男性は結婚して家庭を持って一人前だ

「そう思わない・どちらかというと思わない」

(男子：74.8% 女子：90.2%)

図表 27 「男性は結婚して家庭を持って一人前だ」 男女比



この項目について、男女どちらも否定的傾向が強かったが、女子が男子より15.4ポイント否定的であった。

令和6年度「若者のライフデザインや出会いに関する意識調査」(こども家庭庁)によると、未婚者の50.5%が「結婚することは自然なことである」に当てはまらないと回答しており、結婚について人生の必須条件と捉えていないことが推察される。

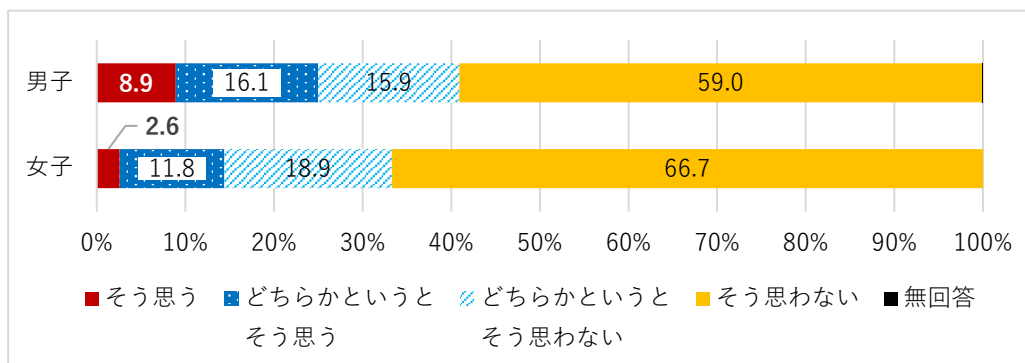
そのような中で、「結婚しなければ一人前ではない」という価値観は、男女ともに受け入れられなかったのではないかと考えられる。

c 家を継ぐのは男性であるべきだ

「そう思わない・どちらかというと思わない」

(男子：74.9% 女子：85.6%)

図表 28 「家を継ぐのは男性であるべきだ」 男女比



この項目について、男女どちらも否定的であったが、女子が男子より 10.7 ポイント否定的であった。

青森県は、全国的に見ると家族観が比較的保守的とされる地域であるが、伝統的な家制度的価値観が高校生世代では大きく後退していることが読み取れる結果となった。

男子の 4 人に 1 人が肯定的であったが、「家を継ぐのは息子」という家族や周囲からの暗黙の期待が影響していると捉えることもできる。

③ その他の項目

下記項目については、男女いずれも否定的な考えであることが分かった。

- 「実の親、義理の親に関わらず、親の介護は女性がするべきだ」
- 「親戚や地域の集まりでは、食事の準備や配膳をするのは女性の役割だ」
- 「女性に理系の進路（学校・職業）は向いていない」
- 「学級委員長や生徒会長は男子が、副委員長や副会長は女子の方が向いている」
- 「共働きで子どもの具合が悪くなった時、母親が看病するべきだ」
- 「共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ」
- 「結婚したら名字を変えるのは女性であるべきだ」
- 「家事（料理・洗濯・掃除等）・育児は女性がするべきだ」
- 「女性は物事を順序だてて考えられない」

3. 5 職場に関する男女の意識

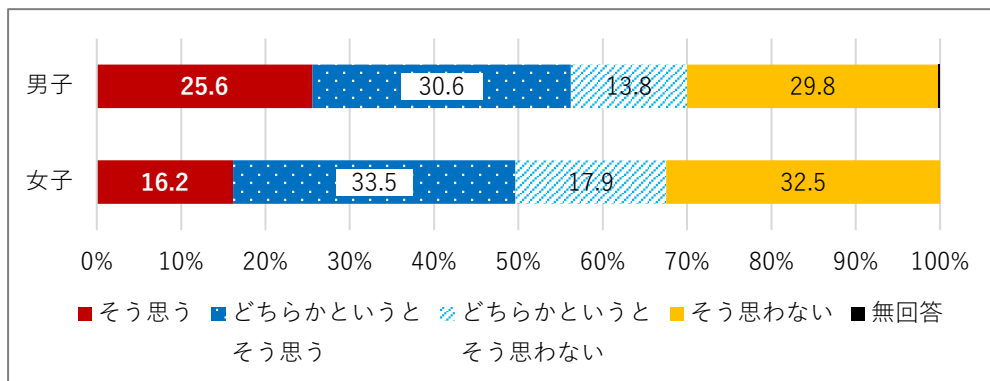
(1) 男女の意識差が表れた項目

① 「そう思う・どちらかというと思う」の割合が高かった項目

a 育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない

「そう思う・どちらかというと思う」（男子：56.2% 女子：49.7%）

図表 29 「育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない」 男女比



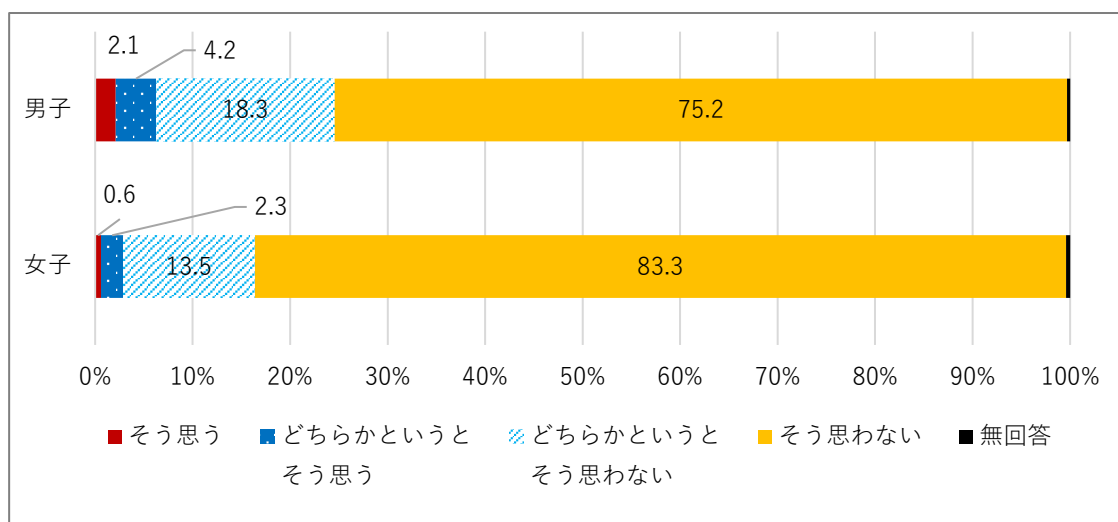
この項目について、男子は女子より 6.5 ポイント肯定的な回答であった。男子の約 6 割が「重要な仕事を担当すべきでない」と考えている一方で、女子の 5 割程度が「育児期間中でも重要な仕事を担当すべきでない」に否定的な回答をしており、男女の意識差がうかがえるとともに、女子の仕事に対する積極的な姿勢が感じられる結果となった。

なお、県の調査によると、育児期間に該当する 30 代女性では 52.2%、40 代女性では 58%が「担当すべきでない」と回答している。これらの結果から、就業経験のない女子高校生と、就業経験を持つ可能性が高い成人女性との間に、一定の意識差が存在することも示された。

② 「そう思わない・どちらかというと思わない」の割合が高かった項目

- a 仕事より育児を優先する男性は仕事へのやる気が低い
 「そう思わない・どちらかというと思わない」
 (男子：93.5% 女子：96.8%)

図表 30 「仕事より育児を優先する男性は仕事へのやる気が低い」 男女比



女子が男子より否定的な要因として、「男性も育児をするのは当然」という認識がより強いことが推察される。

青森県は、全国的に見ると伝統的な性別役割意識が比較的強い地域とされているが、学校でのジェンダー平等教育及びインターネットや SNS による情報などが、高校生の意識形成に影響しているものと思われる。

3. 6 その他（性格・学校・進路など）の男女の意識

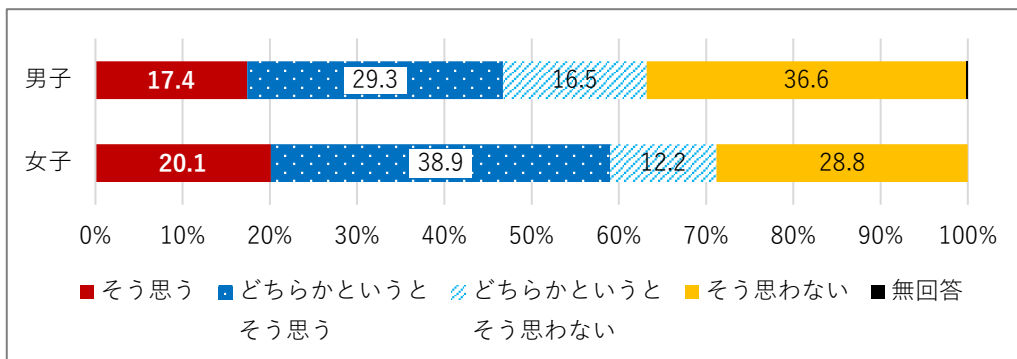
(1) 男女の意識差が表れた項目

①「そう思う・どちらかというと思う」の割合が高かった項目について、男女による違いが表れた項目は以下である。

a 女性は感情的になりやすい

「そう思う・どちらかというと思う」男子 46.7% 女子 59%

図表 31 「女性は感情的になりやすい」男女比



この項目について、女子は男子より 12.3 ポイント高く、男子の約 5 割、女子の約 6 割が肯定しており、女子の方がこのイメージをより受け入れている傾向が読み取れる。

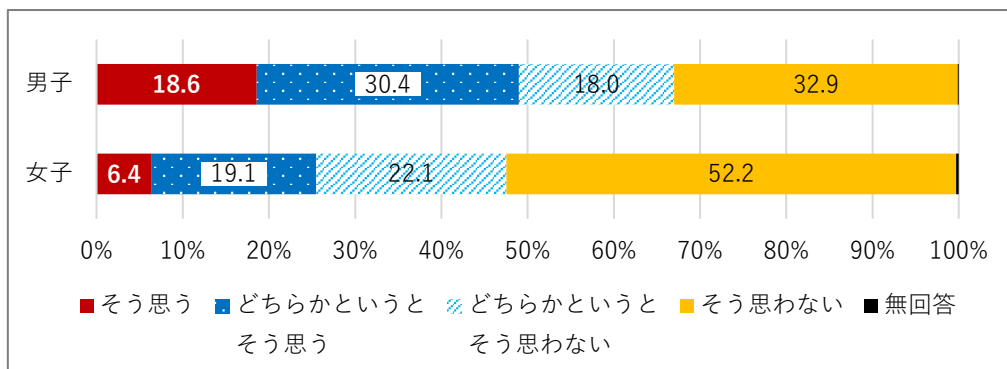
心理学的には、「女性の方が感情的である」という主張には明確な根拠が乏しいとされている。そのため、この結果は、女性自身が「女性は感情的」というステレオタイプを内面化してしまっている可能性を示していると考えられる。

②「そう思わない・どちらかというと思わない」の割合が高かった項目について男女の意識の違いを探った。

a 女性がか弱い存在なので、守らなければならない

「そう思わない・どちらかというと思わない」男子 50.9% 女子 74.3%

図表 32 「女性がか弱い存在なので、守らなければならない」男女比

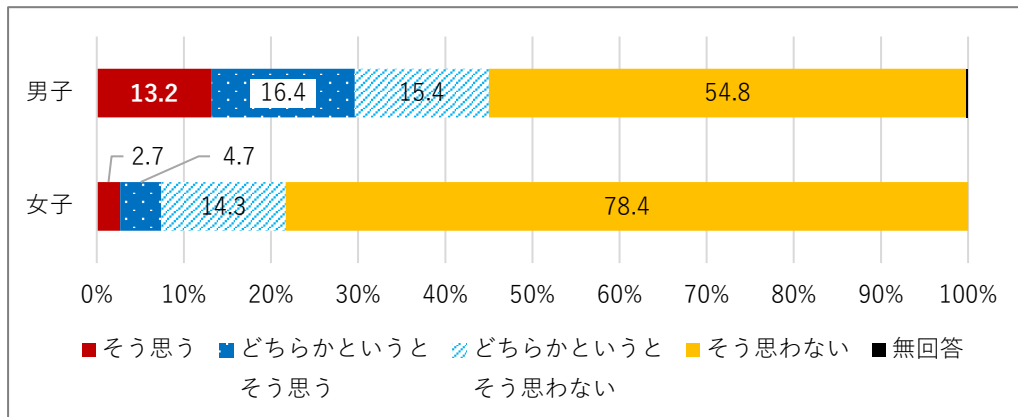


この項目について、女子は男子より 23.4 ポイント否定的な回答であった。男子の半数が「女性=弱い」「男性=強くあるべき」と思っているのに対し、女子の7割以上が自分自身を「か弱い存在」と思っておらず、対等でありたいとの意識が読み取れた。

b 男性は人前で泣くべきではない

「そう思わない・どちらかというと思わない」男子 70.2% 女子 92.7%

図表 33 「男性は人前で泣くべきではない」男女比



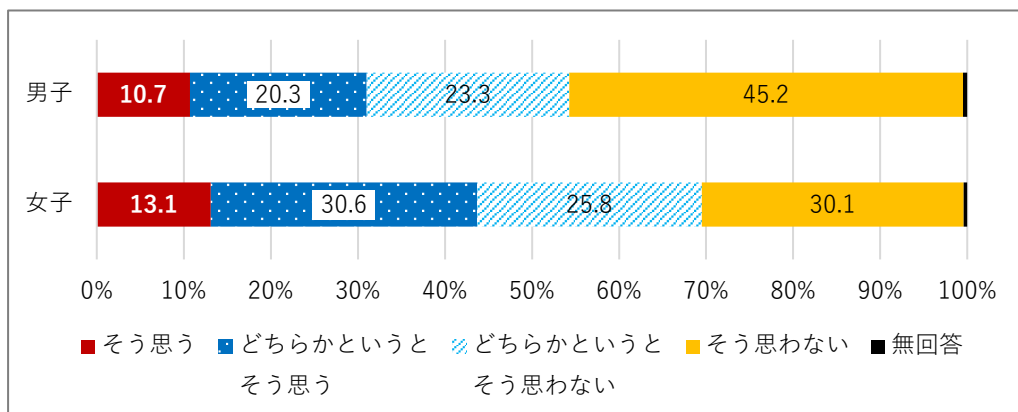
この項目について、女子は男子より 22.5 ポイント否定的な回答であった。男子の方が女子よりこの価値観を支持している理由として、「泣く=弱さ」としての受け止め方が強く、固定的性別役割意識の強い地域性のため、幼い頃からの周囲によるすりこみが影響しているものと考えられる。

一方、女子がこの価値観を否定している理由として、「泣くこと=自由な感情表現」と捉え、男性だけ否定されるべきではないとの認識によるものと考えられる。

c 青森県には女性の活躍できる場が少ないと思う

「そう思わない・どちらかというと思わない」男子 68.5% 女子 55.9%

図表 34 「青森県には女性の活躍できる場が少ないと思う」男女比



この項目について、男子は女子より 12.6 ポイント否定的な回答であった。つまり、女子の方がより「女性の活躍の場が不足している」と感じていることが示された。

この傾向は、青森県における若年女性の県外流出問題とも関連していると考えられる。つまり、「青森県には女性が活躍できる場が少ない」と感じることで、より良い活躍の場を求めて県外へ移動する要因の一つになっている可能性があることが推察される。

なお、県の調査によると、肯定的な回答をした割合は男性が 64.4%、女性が 68.2%で、女性の方が若干肯定的であることが示された。これらの結果から、「青森県には女性の活躍できる場が少ない」と感じている女子高校生は 4 割であったのに対し、成人女性は年代を問わず約 7 割に増えており、年齢層によって意識に差があることが示された。

3. 7 性別に基づく言動

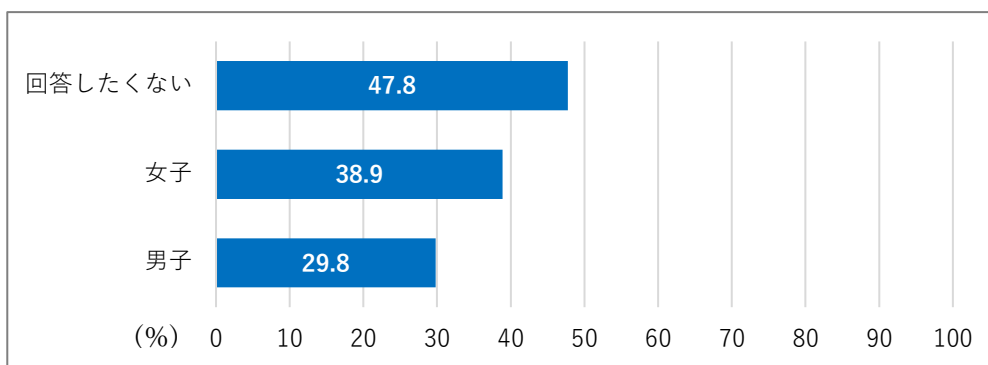
- (1) 性別に基づく役割や偏見を押しつけられたり、そのような場面を見聞きした経験は女子が多い

①性別ごとに「ある」と回答した人の割合

男子 29.8% 女子 38.9% 回答したくない 47.8%

(母数：男子 1,815 人・女子 1,590 人・回答したくない 67 人)

**図表 35 「性別に基づく役割や偏見を押し付けられたり、
そのような場面を見聞きした経験がある」男女比**



「ある」と回答したのは女子が男子より 9.1 ポイント高く、女子の方が性別役割に対する偏見を受けている可能性が高いことが分かった。属性ごとの各項目で母数が大きく異なるため単純比較はできないが、性別を回答しなかった生徒の約半数が「性別役割の押しつけ経験がある」と答えている。性別に関する嫌な経験や、性自認に揺らぎがあったりする生徒、あるいは多様な性のあり方を持つ生徒が、偏見や押しつけを受けやすい状況に置かれている可能性が考えられる。

(2) 性別に基づく役割や偏見を発信した人物

- ①「男性なんだから」「女性なんだから」と言われた相手の割合が高かったのは「母親」、「祖父母や親戚」、「父親」の順であった。

母親が最も高い理由としては、接触頻度の高さにより発言が多くなること、祖父母や親戚については固定的性別役割分担意識が強いこと、父親については接触頻度の低さによるものであることなどが考えられる。

(3) 身近な生活圏よりデジタル空間による影響大

- ①「男性はこうあるべき」「女性はこうあるべき」という情報発信を感じたことがあるもので、最も影響の大きかったものは「インターネット・SNS」で、次はテレビ、ラジオなどの「メディア」であった。

青森県の高校生にとって、身近な存在である学校・地域・家庭よりも、インターネット・SNS・メディアが性別に基づく役割意識を形成する主要な情報源になっていることが分かった。

(4) 「男子は力仕事」「女子は家事」の性別役割分担意識

全体的に一番多かった言動については、「身だしなみ、立ち居振る舞いなど」に関するもので、女子に向けてのものが圧倒的に多かった。

男子に対しては、「男子なら髪を短くしろ」「スキンケアなんていらぬ」「女より筋力がないなんてダサい」などの発言が寄せられた。

一方、女子に対しては、「女の子だからおしとやかに」「上品に振舞って」「髪は長い方が可愛い」「足を閉じて座って」など性別による振る舞いを求める言葉が多く見られた。

男子では、男なんだからという理由で「力仕事を強要された」というものが最も多かった。次いで多かったのは「男だから泣くな」という発言である。痛くても、悲しくても、悔しくても、感動しても泣くなと感情否定された経験が多数寄せられた。「男も涙腺ありますよ」というコメントに、性別に関係なく自分の感情を大切に扱ってほしいという切実な思いが感じられた。

女子では、家庭内の役割に関する指摘も多かった。「女の子なんだから料理ができないといけない」「女性は家事ができるべきだ」「女性だから掃除・洗濯・食器洗いを任される」といった、性別を前提とした役割期待に対する違和感が多く寄せられた。また、親戚の集まりで食事の準備を女性だけが行き、男性は酒を飲んで過ごしていたという場面に疑問を抱いたというコメントも複数寄せられた。

性別による対応の違いについては、男子に厳しく女子に甘い教師の態度、性別を理由に自分の好きなものや行動を否定された経験、さらには校則に対する不公平感などが挙げられた。これらの意見から、性別によって求められる振る舞いや扱われ方に差があると感じている生徒が一定数存在することがうかがえる。

固定的な性別役割分担意識に疑問を呈する意見としては、「性別だけで色を決めたり、担当する仕事を変えたりするのはおかしい。男性でも髪を伸ばしたい人はいるのに、学校では髪を切るように指導されることがある。ジェンダーについて学んでいるのだから、先生たちこそ“男だから”“女だから”という考え方をなくしてほしい」という率直な声が寄せられた。

一方で、「男には男として、女には女としてふさわしい態度があると思う。男性が髪を伸ばすのは女々しく感じるし、逆に女性が男性のようにふるまう社会は違和感がある」という固定的性別役割分担意識を肯定する意見も見られた。

3. 8 まとめ

県外進学・県内就職の逆転現象が示す地域定着の可能性

進路選択の理由については、男女で大きな違いは見られなかった。しかし、進路先の場所に注目すると、進学と就職で明確な違いがあることが分かった。進学では県外を選ぶ傾向が強い一方、就職では県内を希望する割合が高く、男女ともにこの傾向が共通している。このような「県外進学・県内就職」という逆転現象は、将来的な地域定着の可能性を示唆する結果となった。

また、進学率については全国調査と同様に、女子の方が男子より高い結果となった。

男子の方が「固定的な性別役割」を受け入れやすい傾向

全体として、固定的な性別役割分担意識は男女ともに低い傾向が確認された。しかし、「デートや食事の費用は男性が負担すべきである」「男性は結婚して家庭を持って一人前である」「家を継ぐのは男性であるべきだ」「女性はか弱い存在であり、守られるべきだ」「男性は人前で泣くべきではない」といった項目では男女差がみられ、男子の方が“男らしさ”に関する社会的規範をより強く内面化していることが明らかになった。一方、女子はこれらの規範に対するこだわりが弱かった。

職場に関する意識では、「育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきではない」という項目のみ、肯定する割合が全体の5割に達した。しかし男女別にみると、男子の約6割が肯定的であったのに対し、女子は半数に満たなかった。このことから、当事者である女子の、育児期間中であっても積極的に仕事に関わろうとする姿勢がうかがえた。

女子は「外見・振る舞い」に関する性別を前提としたイメージを向けられやすい

高校生の日常場面における経験では、男子には「力仕事を任される」「男だから泣くな」といった言動が向けられ、女子には「将来のために家事ができなければ幸せになれない」といった押しつけや、「おしとやかで可愛くあるべきだ」という性別に基づく役割意識が求められていた。これらの要求を不快に感じる生徒が多かったことから、高校生のジェンダー意識が高まり、固定的な性別規範に対する違和感が強まっていると推察される。

若年女性の県外流出の一因

「青森県には女性の活躍できる場が少ないと思う」という項目では、女子の約半数が肯定し、その割合は男子より12.7ポイント高かった。この傾向は、青森県における若年女性の県外流出問題とも関連していると考えられる。すなわち、女性が「活躍の場が少ない」と感じることで、より良い環境を求めて県外へ移動する要因の一つとなっている可能性が高いことが推察される。

周囲の大人の姿や言動が固定的性別役割分担意識を再生産

高校2年生という年齢を踏まえると、今回の調査結果には、家庭・学校・地域・メディアといった日常的な環境を通して学習してきたジェンダー観が強く反映されていると考えられる。日常生活で目にする大人の姿や言動は、固定的な性別役割分担意識を再生産する要因となりやすく、その影響が生徒の意識にも表れている可能性が高い。

調査では、男子には依然として「男らしさ」への拘りが残っていることが示唆された。一方で、女子においては「女らしさ」への拘りが相対的に弱まりつつあることが明らかになった。

固定的な性別役割分担意識や無意識の思い込みをアップデート

青森県は、全国的に見ても保守的な家族観が根強く、地域コミュニティのつながりも密であるため、伝統的な規範が維持されやすい地域であるといえる。こうした環境の中では、固定的な性別役割分担意識や無意識の思い込みが、日常生活の中で再生産されやすいと推察される。

今後青森県が多様性を尊重し、誰もが自分らしく生き生きと暮らせる地域へと変わっていくためには、一人ひとりが自身の中にある固定観念に気づき、それを自分ごととして見直し、アップデートしていく姿勢が求められる。そうした変化の積み重ねが、若者から「ここに住みたい」と選ばれる地域づくりの重要な要因となるのではないだろうか。